

〈論文〉

満州ピジン中国語と協和語

桜井 隆

キーワード：協和語，沿線支那語，ピジン，中国語，「満洲」

0. はじめに

「満州国」では「協和語」と呼ばれるピジンが使われていたことが知られている。しかしこのピジンは、「満州国」の成立（1932）によって生まれたものではない。日露戦争の講和を定めたポーツマス条約（1905）により，日本は関東州（遼東半島）を租借し，南満州鉄道の権益を得た。日中語の恒常的な接触はこの時から始まり，「満州国」成立の時にはすでにピジンとしての体裁を整えていた^(注1)。

「満州」のピジンは，「協和語」の他にもさまざまな名称があげられる。たとえば金水（2008：29）は——「兵隊支那語」「沿線官話」「沿線支那語」に類似した概念として，「協和語」「日満親善語」などというものがあつた——と言う。ただ，「類似した概念」と言うが，それがどのようなものであるか，また「概念」の異同は何なのかは明らかにされていない。

本稿では，これらの名称を整理し，「協和語」とは何かを確認したい。

I. 日本の文献に見る名称

戦前・戦中「満州」で刊行された日本語の新聞や雑誌，「満州」事情を伝える図書，戦後の研究書などを見ると，このピジンはさまざまな名称で呼ばれている。筆者が確認しえた名称を文献の刊行年順に列挙する。引用文中の下線は筆者のものである。

I.1 「満洲国」成立（1932）前

① 日支合弁語（1924）

『満洲日日新聞』に，中谷鹿二は1924年2月11日から同年3月28日まで，34回にわたって「正しき支那語の話し方と日支合弁語の解剖」を連載した。中谷は，その連載の第二回（1924.2.13.）の中で，その命名について下のように述べている。

支那語と日本語の混合した前記の如き妙な言葉で、仮にこれを「日支合辦語」と命名した。「日支合辦何々洋行」又は「日支合辦何々銀行」のある今日、こういふたとて妥当を欠くやうなことはあるまいと思ふ。

中谷はその後、大連で中国語学習雑誌『善隣』を刊行したが、その中でも一貫して「日支合弁語」を使っている。

1.2 「満洲国」成立（1932）以後

② ぼこぺん支那語・ぼこぺん語（1932）

中谷鹿二の主宰する雑誌『善隣』には、さまざまな人が寄稿している。小田切楨雨は連載コラム「支那の性格」第40回の題名を「ぼこぺん支那語」として、次のように述べている。

よく日本の奥さん連中が野菜屋の支那人と半可通な支那語で話するのもこの「ぼこぺん支那語」と云ふ場合がある。この半分日本語半分支那語の「ぼこぺん語」も實は支那語専門家より云はしむれば全く嫌厭もので唾棄せらるべきものとされて居る……。 (小田切 1932 : 44)

中谷の主宰する雑誌の中でも、「日支合弁語」という名称は広まることはなく、人それぞれ、この種の中国語に様々な名称を与えていたのである。

③ 日満合弁語（1935）

「満洲国」の執政・溥儀が皇帝になるにともない、その国名も「満洲帝国」となった（1934）。このためであろうか、中谷（1935 : 62）は名称を変更している。

「日満合辦語」^{ママ} 原來「日支合辦語」といふべきであるが時節柄名称を變更したまでである。

④ 中日合弁語（1937）

中谷鹿二は『善隣』（昭和12年5月号）に、「打倒中日合辦語」という中国語の短い文章を掲載した。題名の脇に「高級欄」とあるので、これは中国語学習者の上級用読み物として書かれたものであろうと思われる。中国語文の後に日本語の「譯文」があり、その題名は「日支合辦語を打倒せよ」である。中谷は「日支合弁語」の中国語訳名として「中日合弁語」を使ったのである。

なお、中谷はここでは、先に挙げた「日満合弁語」ではなく「日支合弁語」を使っている。

⑤ 日満親善語（1938）

タナカ（1938 : 21）には次のようにある。ちなみに。その掲載誌『オチボ』はカナモジ論者・上野陽一により創刊された雑誌なので、漢字カタカナ表記、分かち書きである。

ムシアツイ 事務室ノ アル 1ニチ「ショーハイ (小輩一ボーイ ノ コト) リャンスイ (冷水) ナーライ (持ッテ コイ)」ト ユウ ノニ ウヤウヤシク チャースイ (茶水) ラ モッテ キタ。

「バカ ! リャンスイ ダ」ト ユウ ト アワテテ トンデ イク。コンド ワ チャワ
ン 8コ ナラベテ キタ。 バカ ラ パーコ (8コ) ト 聞イタ ノデアル。

コンナ コト ワ ザラ ニ アル。

ソレデモ 日本人ワ 平氣デ 満語ヲ テニオハ デ ツナイダ 日満親善語 デ 押シ通
ソート スル。

ハナハダシイ ノニ ナルト 日本人ノ シャベル 満語ヲ 日本語ダト 心得テイル 満
人モ アル。

ここに描かれているのは「親善」と呼べるような状況ではない。「日満親善語」という名称は、皮肉を込めたものであることは、言うまでもなからう。

⑥ 日本語的満語 (1938)

タナカ (1938 : 21) は上記の文章のすぐ後、次のように続けている。ここには「日本語的満語」という名称が見られる。

北ノ ハテ チャムス (筆者注：佳木斯) アタリ ノ 満人ガ 新京ニ デテ クルト 満
人同志デモ コトバ ガ 通ジナイ。東北人ト九州人トガアッタヨーナ モノ デ アル。

コンナ 手合ガ 日本人ノ 日本語的 満語 ラ 聞クト 「日本語 満語 トントン デ
イーヤン (全ク 同ジダ)」ト ユウ。ムリ モ ナイ。

タナカの使う名称に一貫性はない。「日満親善語」にせよ「日本語的満語」にせよ、その場で思いついた呼び方をしただけであろう。

⑦ 日満語 (1939)

言語関係の記事ではないが、「満州」事情を伝える図書にも、この種の言語が記されることがある。岡田 (1997 : 130) は、山田政三郎『北満の一夜』(1939 : 167) の一節を紹介している。

「日満語」といふのは、開拓地に芽生えた、満語と日語の合の子で、例へば、沢山御馳走するといふのを^{ただめしめし}多々飯々といふ類である。(山田 1939 : 167)

また、前田 (2003 : 236) からの重引であるが、伊藤信雄『北満教育建設記』(1942 : 46) にも同じく「日満語」が見られる。

「頂きます」(略)

「御馳走様, オーデカイワンラ！」(我的快完了)

「駄目だ, そんなに早く食べちや。そこいらにご飯粒こぼしてるだろ！」

(略)

「快快的吃飯不行！」

日満語, といつてもホンの片言が錯綜する。(伊藤 1942 : 46)

⑧ 日満混淆語 (1941)

野村正良「満洲国の言語概観－満洲国の言語的構成」(1941 : 46) には下のような一文がある。著者・野村正良はモンゴル語を専門とする言語学者である。当時「満州」のビジンに言及した人々の中で、もっとも学術的に言語を見ることが出来る人であったといえよう。この野村が使った名称は「日満混淆語」である。

之を要するに現地にあつて自己の生活を快適なものとするには、各民族共に其の成功の度合にはいろいろあるが多少なりとも bilingualistic な生活が必要のやうであり、かくて又 日満混淆語, 商用ロシヤ語の勢力も中々強大である。

⑨ 日本製満州語 (1941)

「満州国」の日本人学校では中国語が正課として教えられていた。その教科書の教師用指導書『初等支那語教科書教授参考書 卷三』(1941 : 44) には、次のような文がある。

尚「等一等」といふ意味の時邦人が「少々漫々の」といふのは、日本製満州語である。

⑩ 沿線官話 (1926～1941)

野村章 (1995 : 57-58) は下のように記している。この著者・野村は1926年に大連で生まれ、1941年まで同地で過ごした (野村章 1991)。当時の直接的な見聞をもとにした記述であると考えられる。戦後に書かれたものであるが、同時代の文献に準じてここに取り上げたい。

「困ったときには漢字で書けば通じるさ」という尊大な態度と、武力にささえられた乱脈な半中国語は、そのまま「満洲」に移住する日本人の間にひろまり、カタカナ発音と日本語をもこねあわせた珍妙な会話となって普及していった。

「満洲」では日本人の定住は南満洲鉄道の沿線に最も多かったから、北京官話になぞらえてこの珍妙な会話は「沿線官話」などとよばれた。

⑪ 沿線支那語

竹中（2004：367）は『初等支那語教科書（稿本）教師用』（1927～1931）の解説の中で次のように言う。

『稿本 教師用』には中国語教育に付随する問題も記されている。

第一に、日本人の間で使用されていたいわゆる「沿線支那語」の問題を取り上げている。例えば『稿本 教師用』は「沿線支那語」について、次のように解説を加えている。

しかし、『稿本 教師用』の中には、「沿線支那語」という名称は出てこない。竹中はどこからこの名称を得たか記していないし、筆者もまだ同時代の文献の中に見出せないでいる。ただ、冒頭で引用した金水（2008：29）にも挙げられている名称なので、ここに掲げておく。

⑫ 兵隊支那語

日本語と中国語のピジンには「兵隊支那語」と呼ばれるものもある。これは日本陸軍の兵士が使用したもので、その使用地域は「満州」以外にも広がっている。これについては、別稿で扱うこととする。

⑬ 興亜語・大東亜語

Wikipediaの「協和語」の項に出ていた名称であるが、典拠は示されていない。いずれも文献上では筆者未見である。本来ならここで取り上げるべきものではないかもしれない。

1.3 満州ピジン中国語

以上、名称こそ異なるが、いずれも同じタイプの言語であるということができよう。これに共通するのは、ピジン性である。中谷（1937a：49）は「日支合弁語」がピジンであろうことを指摘している。

私は上海に一種の「ピジョンイングリッシュ」と云ふのが人力車夫の間に流行つてゐると聞いてゐるが、私の見る所では、吾々の此「日支合弁語」たるや恰もこの「ピジョンイングリッシュ」に彷彿たるものがあり、この勢力は實に大きく、将来の發達たるや量り知るべからずであると思ふ。

ただ、このピジンには定まった名称がない。さまざまな執筆者がそれぞれに思い思いの名称を与えているのである。それらをまとめて、言語学的に中立的な名称を与えるなら、「**満州ピジン中国語**」とするのが妥当ではなからうか。その英語名は **Manchurian Pidgin Chinese** となろう。

Ⅱ．協和語

Ⅱ.1 協和語

ところで、これまで見てきたように、当時の日本側の資料には「協和語」という名称は現れない。安田（1997：267）は次のように言う。

当時あって「協和語」という呼称が用いられた文献資料をいまだに探せない。それは中国側の研究書を見ても同様であり、どれも「所謂『協和語』」という表現をするのみであり、その言葉の典拠を明確にしていない。

それにも拘わらず、安田（1997：268）は「ともあれ、ここでは『協和語』という名称を」用いることとしている。

岡田（1997：130-131）の用語法はさらに不可解である。下に引用する。

「協和語」とは、日本人と中国人の交流のなかから自然と生まれてきた、日本語でもなく、中国語でもない奇妙な言い回しをいう。在満日本人作家の代表格であった山田三郎はこう説明する。「『日満語』といふのは、開拓地に芽生えた、満語と日語の合の子で、例へば、沢山御馳走するといふのを多々飯々といふ類である」（『北満の一夜』万里閣 一九三九年四月、一六七頁）

「日満語」あるいは「協和語」とは、開拓地だけのものではない。（略）

このように「協和語」とは、言語を異にする日本人と中国人が、日常的な意思疎通をはかるために生みだした一種のピジン（pidgin）語といえる。（略）

以上のように「協和語」を位置づけたうえで、日中双方の文学作品のなかにあらわれた「協和語」を素材として、「協和語」がつかわれていた現場の実態とともに……。

岡田は最初から「協和語」という名称を所与のものとして掲げている。しかしその後引用する、同時代の文献に出てくる名称は「日満語」である。引用の直後では「『日満語』あるいは『協和語』」と併記しているが、それ以後は一貫して「協和語」のみを使っている。当時の文献に現れる「日満語」を捨てて、典拠の示されていない「協和語」を使うのは不可思議である。

「協和語」という名称がこれほどに権威を持ってしまったのはなぜだろうか。そもそも「協和語」という名称の典拠は何なのであろうか。

管見の限りではあるが、「協和語」という名称は、まず中国語の文献に現れる。岡田（1997：138）は「協和語」の用例で、かなり早いと思われる時期のものを二つ紹介している。そのいずれも1948年に発表された中国語文の和訳であるが、下に同論文から重引する。

「協和語」とは偽満で流行し、日本人が何とか聞きとれるようにと、日本語の文法や話しぶり

を中国人がまねてつくられた、中国語でも外国語でもないあやしげな言語なのである。（『填鴨式』与「協和語」〈『生活報』1948年7月26日〉

協和語は一四年にわたる日帝統治の産物であり、日本語と中国語の乱交から生まれた変り種である。…（魏東明『六要六不要一写作漫談之』〈『生活報』1948年8月21日〉）

筆者はこれらの原文を確認していないが、「協和語」という名称がそのままの形で、ここで使われているとすれば、文献上では、まず中国語の資料に現れたということになる。

筆者が確認し得たところでは、1958年の王立達の論文「現代汉语中从日语借来的词彙」の中に「協和語」が現れる。

“協和語”这个名称的起源，是因为日伪的窃据东北时期曾成立所谓“协和会”，其中大小汉奸在講話中喜欢夹杂几个日语字限（王1958：94）

拙訳

「協和語」という名称の起源は、日本が東北地方を占領した時期に所謂「協和会」を設立したことによる。そこでは大小の漢奸が話の中に好んで日本語の単語を交えて使った。

それでは、日本語の文章の中に「協和語」という名称が現れるのはいつ頃からであろうか。その早い例は、陳原『社会言語学ノート ことばと社会生活』（1981：103）ではなかろうか。同書の「凡例」によれば、これは陳『語言与社会生活—社会語言学礼記』（1980）の翻訳である。

外国ではまだ、一部のいわゆる学者が、ピジンに類似した「協和語」を残存させようと努めてはいるが、今日の歴史の流れにつれて、人民大衆は、このような汚染されたことばを必要としなくなっている。

ここで述べられているのはこれだけで、「協和語」とは何であるかということさえ説明されていない。

ただ、日本人が自らの文章中に「協和語」という名称を使用するのは、これ以降の時期のようである。こうした状況を考えると、「協和語」は中国人の間で使われていた名称で、それが日本語に取り入れられたと考えることができよう。

当時の日本人がこの言語変種を「協和語」と呼ぶなどということは、ありえないと思われる。戦前・戦中の日本側の資料を見ると、その名称は何であれ、このピジン中国語は矯正されるべき誤用、撲滅されるべきものとして取り上げられている。一方「五族協和」は、「満州国」の国是とも言えるスローガンである。その「協和」を、撲滅されるべき言語変種の名称に使うことなど、考えられな

いであろう。

「協和語」は、中国人の側が、皮肉を込めて名付けたのであろうと推測する。

Ⅱ.2 協合語

ところで、中国語からの翻訳で「協和語」という名称が使われていても、それが原文では「協和語」と記されているわけではないこともある。例えば李增儒「鉄道での暴行」(大沼正博訳1991:101)である。ここには次のような文章がある。なお、亀甲括弧内は訳者による注である。

一九四四年のある日、私は同僚と米市大街の芮克映画館（現在の紅星映画館〔一九三八年開館のハリウッド映画専門館〕）に映画を見に行った。映画がはねると戸外で急に騒々しい人声が聞こえ、誰かが「協和語」〔中国の庶民が、日本語と中国語ちゃんぽんの日本語の言葉をこう呼んだ。漢奸が真似て自らの地位の証しとした。この風習は「満州国」も「協和会」で始まった〕で「コラ、バカヤロ、みんな出て来い」と罵っていた。映画館はたちまち混乱した。(李1991:101)

この原文、李「鉄路上の暴行」(1987:352)の中の該当部分は下の通りである。

1944年一天，我和车站同事去米市大街芮克电影院（现改为红星电影院）看电影。散场时，忽听门外人声嘈杂，有人在用“协合语”骂人：“哭拉八嘎业路（混蛋）！通通的出来！”电影院里立刻乱作一团。

日本語訳では「協和語」となっているが、原文では「協合語」、日本の漢字表記をもってすれば「協合語」である。

「協和語」は「満州」で使われた名称であるが、ここで述べられているのは北京での出来事である。北京ではこの種の言語変種を「協合語」と呼んでいたのであろうか。あるいは「協和語」であったものを、単に覚え間違い、書き間違いしてしまっただけなのだろうか。またそれを「協和語」と翻訳し、訳注まで加えているのは、この種のもはすべて「協和語」とされてしまうほど、この名称が権威をもってしまったのであろうか。

Ⅱ.3 「協和語」の指すもの

さて、「協和語」は「満州ビジン中国語」のさまざまな名称の一つなのであろうか。即ち、「日支合弁語」や「沿線官話」などが日本側の名称であるのに対し、それと並ぶ中国側の名称が「協和語」なのであろうか。

中国語の文献を見ると、「協和語」という語はビジンだけでなく、もっと広い範囲の言語現象を指して使われていることがわかる。以下に「協和語」が何を指しているか、具体的に検討してみる。

II. 3. 1 ピジン

「協和語」はまず、日本語と中国語の接触によって生じたピジンの名称となっている。陳（2001：76）は次のように言う。

什麼是「協和語」？就是日本式的語法和詞彙滲到漢語中，打破了漢語的慣用語法，詞彙，生吞活剥地把日本語的一些因素，文法的因素，詞彙的因素結合進來，變成一種不三不四的，被稱為「協和語」的東西。

拙訳

「協和語」とは何か？中国語の中に日本語式の語法と語彙が混入し、中国語の慣用語法・語彙を打ち壊し、日本語の一部の要素が丸のまま入り、文法的要素・語彙的要素が結合して、得体の知れないものが生まれた。これが「協和語」と呼ばれるものである。

II. 3. 2 外来語

しかし、「協和語」が指すのはピジンにとどまらない。王「現代漢語中从日語借来的詞彙」(現代中国語における日本語からの借用語彙) (1958) は、中国語に入った日本語の語彙を「協和語」と呼んでいる。

“协和語”这个名称的起源，是因为日伪的窃据东北时期曾成立所謂“协和会，其中大小汉奸在講話中喜欢夾杂几个日語字限；人民并無好感，就把这种話叫“协和語”。此如，“町，番地，案内，出張，出荷，郵便，満員，主催，急行券，放送局”，等等…。(王1958：94)

拙訳

「協和語」という名称の起源は、日本が東北地方を占領した時期に所謂「協和会」を設立したことによる。そこでは大小の漢奸が話の中に好んで日本語の単語を交えて使った。人々はそれに全く好感を持たなかったが、このような言葉を「協和語」と呼ぶ。例えば「町，番地，案内，出張，出荷，郵便，満員，主催，急行券，放送局」などである。

ここでは中国語に借用語（外来語）として入った日本語の単語を「協和語」としているのである。

II. 3. 3. 1 カタカナの導入

さらに安田（1997：268）は、日本文字の侵入を「協和語」と呼んでいる例を紹介している。

「滿洲国」の学校教育の国語科における「満語」の教科書においては、「まず日本人が草稿を編集し、それから中国語に訳したが、外国人の名前・地名は訳さないで、日本語のままにして

おいたので、中国語と日本語が混ざった言葉——植民地「協和語」が形成された」(王^{WANG} [1989: 102]) というように、教科書における日本文字の侵入——地名、人名——も「協和語」と説明されている。

そして、次のような例を挙げている (p.269)。

那個曾充過カリボティ將軍部下頸上有傷痕的先生……。

オカヤマ ヒロシマ 岡山和広島之間，有個叫作尾道的小市鎮。[……] タイシヨウ 大正十一年春，……。

これは、

- ① 中国語の表記に表音文字（カタカナ）を導入し、外来語表記の便宜をはかった
- ② 振り仮名を導入し、原語（日本語）の読み方を明らかにした

ということである。ただ、それは固有名詞のレベルにとどまっている。したがって、ここでは中国語はピジン化していないのである。

Ⅱ. 3. 3. 2 満州カナ^(注2) と協和語

カナ文字の導入は「満州カナ」を想起させる。「満州」においては、中国語そのものをカタカナで表記しようという試みが続けられていた。これはやがて「満州カナ」の制定 (1944) につながる。石 (2005: 90) は、このようなカナの導入から「協和語」が生じたとしている。

「満洲カナ」を制定する前の一九三五（康德二）年から、すでに計画的に学校の「満語」「歴史」「地理」「理科」などの教科書で、外国の人名、地名、国名、および専門用語などの表記にカナが用いられ、新聞、雑誌、書籍などの出版物にもときどきつかわれていた。また、固有名詞、日常用語も日本語の発音のままでもカナで導入されている。このため、日本語が話しことばのなかに自然に侵入し、また日常の必要に迫られてつかわざるをえないという圧力により、語彙はいわずもがな、文法レベルの二言語混合の現象がすでに起こっていた。これがいわゆる「協和語」である。

しかし、「満州」において日中語のピジンは、カナの導入が始まる以前、「満州国」が成立した時 (1932) にはすでに使われていた。中谷の連載記事「正しき支那語の話し方と日支合辦語の解剖」(1924) はその存在の証明となろう。石 (2005) の上の論述は、史的事実に合致しない。

石 (2005: 91) はこれに続けて、さらに下のように述べている。

台湾でも類似の現象が起きたにもかかわらず、「協和語」などといういいかたは、台湾におい

ては一度も現れなかったばかりか、「国語」を汚す言葉の乱れとしてそれを撲滅しようというキャンペーンが繰り返されたのである。このことを念頭において考えると、同じピジン問題についても、政治と文化状況の違い、もっと端的にいえば、植民地、占領地での統治政策の違いにより、それにしたがって違った要請があったことが読みとれるのである。現に、「協和語」に対する容認というより、むしろすすんでそれを提唱しようとした動きが言語政策の一つの現れであったのである。（石 2005：91）

「協和語」を固定化し、さらに発展させることを本来の使命とした「満州カナ」も……（石 2005：92）

この論述も事実と反する。「協和語」というのは中国人の間で皮肉として使われた名称である。また日本側の資料でも、ピジン中国語は撲滅すべきものとして捉えられていた。それを「容認」し、「すすんでそれを提唱し」、「固定化し、さらに発展させる」などということは考えられない。そもそも石（2005）の一連の論述は、何を根拠としているのか、史資料の提示もなされていない。

「満州カナ」は中国語をカナで表記しようという試みである。日本語と同じ文字を使用すれば、確かに日本語の語彙が流入しやすくなり、結果として日中語のピジンが生じる可能性もある。しかし、「満州カナ」の導入はいわば中国語の文字改革であり、ピジン中国語を発展させることではない。また、「満州カナ」の制定に至る過程は「満州国政府」のコントロールの下にあり、撲滅されるべきピジン、冷笑の対象になっていた「協和語」がそこに入り込むことはなかったはずである。

ただ、王（1989）は日本文字の侵入した中国語を「協和語」としているのだから、「満州カナ」が導入された中国語は、もちろん「協和語」と呼ばれることになるであろう。

II. 3. 4 誤用

ピジンではなく、誤用と考えた方がよいであろうものも、「協和語」と呼ばれる。野村章（1995：58）は、そのことを伝えている。

また「満洲国」政府の中国人官吏の中には、日系官吏の拙劣な発音や日本人本位の表現を冷笑して、それを「協和語」と皮肉る風潮もあった。

陳原「語言的汚染與淨化」(1980)は、次のようにその実例を挙げている。刊行時の原文を手にすることができなかったので、台湾で刊行された『語言與語言學論叢』(2001：76)から引用することにする。繁体字で表記されているが、文章自体は変わらないと思われる。

試從滿洲事情案内所報告（第五十八本）《滿洲農業概況》中摘出一段比較好懂的例子：

「人生所需要的衣，食，住一切物品，無一不可以大豆供給的，福特汽車王曾經講過，『完

全用大豆作成而使用豆油馳驅的汽車，不久就可以出現了」，由這句話也可以窺知大豆的用處偉大了，大豆有以上的廣範的用處，所以在小將來發展上有莫大期待的。」

(略) 它把日本語中の標點符號の用法，引語の用法，生吞活剥地移過來，而且還使用了別字(廣泛作廣範)，使用了誰都不懂的語言，譬如說「完全用大豆作成而使用豆油馳驅的汽車」，怎麼汽車能完全由大豆做成呢？不，恐怕是「完全用大豆做成豆油，用豆油作為動力來開動汽車」的這種想法，這種「協和語」的思想，也許寫的人懂，但是寫的人不能把自己的思想表達給別，因此別人看了，不能準確地領會他說的是什麼。

拙訳

滿洲事情案内所報告(第五十八本)《滿洲農業概況》より，比較的わかりやすい例を一節取り出そう：

(略)

(略) これは日本語の句読点・引用法をそのまま移し，異なる文字を使用し(「廣泛」を「廣範」としている)，誰もわからない表現を使っている。例えば「完全用大豆作成而使用豆油馳驅的汽車」とあるが，どうして大豆だけから汽車(自動車)が作れるであろうか。いや，恐らくこれは「完全用大豆做成豆油，用豆油作為動力來開動汽車」ということであろう。この種の「協和語」的発想は，書いた人がわかって，自分の考えを他の人に伝えることはできず，これを他の人が見ても，何を言っているのかははっきりとはわからない。

安田(1997:436)はこれを，「中国語を母語としない者の書いた中国語であり，どちらかといえは「誤用」の例に入るのではないかと思われる」としている。

筆者もその見解に与する。書いた者は中国語を学習したのであろうが，その語学能力が不十分のままに書いた中国語文である。また，少なくともこれをピジンとは言うことはできない。ピジンは日常の間に合わせに使われる混交語である。これが公文書のようなところで書かれるということは，ない。

しかし陳(1980)はこれを「協和語」の「比較好懂的例子」(比較的わかりやすい例)としているのである。

II. 3.5 「下手な中国語」

前田(2003:219)は「『協和語』の定義は今のところはっきりしていないので，今回は使わないこととする」として，下のような会話を紹介している。これは新居格(編)『支那在留日本人小学校校級方現地報告』(1939)に掲載されている，小学生の作文の一節である。下の引用では読みやすくするために改行し，話者の母語を示し，前田が加えた漢字表記と日本語訳を発話のすぐ後に記す。

支那語や日本語をまぜて，野菜売りが来た。

中「タイタイ。」(太太=奥さん)

日「センサイプヨ。」(現在不要=今はいらぬ)

中「シユマユウ。」(甚麼有=なんでもあります)

日「にんじん, だいこん, ねぎ, かぼちや, きうり, あんず。」(と現物を確認している様子か)

中「シヨマシヨマユウ。」(甚麼甚麼有=なんでもあります)

日「じゃがいも, メイユウマ。」(じゃがいも, 没有嗎=ないか)

中「メイユウ。」(没有=ありません)

日「メイユウデ, チンチンプヨ。」(没有的, 今天不要=ないのなら, 今日はいらぬ)

中「アイヨ。」(哎哟=感動詞。そうですかあ)

日「さやうなら。」

ピジン中国語の会話であり、「協和語」の範囲に入るものである。しかし、前田(2003:220-221)はあえて「協和語」という名称を避け、この日本人の発話を「不自然な、というより下手な中国語である」としている。これが最も慎重な態度であろう。

II.4 「協和語」の定義

これまで見てきたように、「協和語」と呼ばれるものは、ピジン以外のものをも含んだ、かなり広い概念のものである。ここであえて「協和語」を定義すれば、日本語的な要素が混入した中国語を総称したもの、と言えよう。具体的には、「満州ピジン中国語」だけでなく、日本語から中国語に入った外来語やカナ、さらには日本人の「誤用」あるいは「下手な中国語」をも含む概念である。

このことは、研究者の間ではきちんと認識されていなかったと思われる。それゆえに不用意に「協和語」という名称を使い、議論に混乱があった。正確には、「日支合弁語」「日満親善語」「沿線支那語」などは「満州ピジン中国語」としてまとめて扱い、これと「協和語」とは区別して考えるべきであろう。

最後に、「協和語」という語のニュアンスについて考えてみたい。

「協和語」は蔑称である。もちろん、日本側から見ても満州ピジン中国語は撲滅されるべき言語変種であり、「日支合弁語」などの名称はすべて軽卑語である。しかし、「協和語」という名称は、それ以上の強い拒否感をもって使われたとみるべきではないかと思われる。

原口『支那人に接する心得』(1938:7-8)は次のようなエピソードを記している。

これは支那通の一民團長の話であつたが、或日本人の總領事の令夫人が官舎に使つてゐる支那ボーイに向つて、「チヤンコイ、まだ歸らないか」といふのを聞いて、偶々支那語の解る自分は余りの情けなさに涙が出る程くやしかつたと嘆いてをつた。「チヤンコイ掌櫃」の意味は日本語で「番頭」と譯してゐる。自分の夫であり、勅任官の總領事閣下を指して、「番頭まだ歸らぬか」と言ふのを聴いて、日本人たる者誰か憤慨せざらんやである。

この「掌櫃」は中谷（1924.2.24）に見られる。「日支合弁語」の語彙である。原田（1938：7-8）はこれを、中国人に対し、支配者たる日本人の体面が保てない、と慨嘆しているのである。ピジン中国語を撲滅しようという根底には、こうした心情があったのであろう。

これに対して陳（2001：75 -76）は、「協和語」に触れる時、下のように語り始める。

「九一八」以後、日本軍國主義實際上は占領了東北，後來成立了偽滿洲國，在偽滿洲國語言文字の使用上產生了一種非常令人痛心的污染現象，就是流行了一種叫做「協和語」的東西。（陳 2001：75 -76）

拙訳

「満州事変」以後、日本の軍国主義は事実上東北地方を占領し、偽満州国を成立させた。偽満州国の言語・文字の使用は、人の心を非常に痛ましめる汚染現象を生み出した。すなわち、「協和語」と呼ばれるものが流行したことである。

「協和語」は、こうした文脈で語られる。それは日本の中国侵略に直結するものである。

中国では「満州国」は常に「偽」という接頭語を伴い、「偽満州国」と呼ばれ、書かれる。「国家」としての存在などまやかしかである、という立場の表明である。それと同じように、「協和語」という語にもまた、存在そのものが許されない、という意識が込められているのではなかろうか。日中ともにこのピジンを疎んでいるが、その気持ちの深さが異なると思われる。深読みに過ぎるであろうか。

注

- (1) 拙稿「日中語ピジン — 「協和語」への序章」『明海大学外国語学部紀要』第24集（2012）を参照されたい。本稿はその続編として書かれたものである。
- (2) 「満州カナ」は安田（1997：251-266）が詳述しており、現在に至るもこれを越える研究はないようである。ただ、豊田国夫『民族と言語の問題』（1964：318-322）がこれに言及していることを、ここに記しておきたい。戦後「満州カナ」をきちんとした形で取り上げた、早い時期の研究として評価できよう。

参考文献

- 岡田英樹（1997）「歪んだ言語風景——「満洲国」における言語の相互浸透」日本社会文学会（編）『近代日本と「偽満州国」』 不二出版
- 小田切楨雨（1932）「支那の性格 第四十 ぼこべん支那語」『善隣』4月号 善隣社
- 関東局在滿教務部教科書編輯部（1941）『初等支那語教科書教授参考書 卷三』 関東局在滿教務部教科書編集部
- 金水 敏（2008）「日本マンガにおける異人ことば」伊藤公雄（編）『マンガのなかの〈他者〉』 臨川書店
- 石 剛（2005）『日本の植民地言語政策研究』 明石書店

- タカタコトサプロウ (1938)「満洲ノ日本語教育」『オチボ』8月号 日本産業能率研究所
- 竹中憲一 (2004)『「満州」における中国語教育』柏書房
- 陳原 (松岡栄志・白井啓介・刈間文俊・陳立人 共訳) (1981)『社会言語学ノート ことばと社会生活』凱風社
- 豊田国夫 (1964)『民族と言語の問題』錦正社
- 中谷鹿二 (1924)「正しき支那語の話し方と日支合辦語の解剖」『満洲日日新聞』2月11日～3月28日
- (1937a)「打倒中日合辦語」『善隣』5月号 善隣社
- (1937b)「日滿合辦語に因んだ閑談」『善隣』10月号 善隣社
- 野村章 (1991)『植民地そだちの少国民』岩波ブックレットNO.186
- (1995)『「満洲」「満洲国」教育史序説』エムティ出版
- 野村正良 (1941)「満洲国の言語概観 - 満洲国の言語的構成」『コトバ』国語文化研究所
- 原口統太郎 (1938)『支那人に接する心得』實業之日本社
- 前田均 (2003)「在外児童作文集に見る言語混用の実態 - 日本語と中国語を主にして」小島勝 (編)『在外子弟教育の研究』玉川大学出版部
- 安田敏朗 (1997)『帝国日本の言語編制』世織書房
- 李增儒 (1991)「鉄道での暴行」北京市政協文史資料研究委員会編 (大沼正博訳)『北京の日の丸』岩波書店
- 陳原 (1980)「語言的汚染與淨化」2001『語言與語言學論叢』臺灣商務印書館
- 李增儒 (1991)「铁路上的暴行」中国人民政治协商会议北京市委员会文史資料研究委员会編『日伪統治下の北平』北京出版社
- 王立达 (1958)「現代漢語中从日語借来的詞彙」中国語文編修委員会『中国語文』2月号 人民教育出版社